



2003年 10月15日発行(隔月刊)



う 羽 化 か

2003年10月
第40号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
 〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
 発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
 編集責任者 宇田川 幸 子



目 次

漢点字講習用テキスト (初級編 第1回-3)	I
連載「点字から識字までの距離」(37) (山内 薫)	1
私とボランティア活動、漢点字について (後半) (平瀬 徹)	4
進路指導について (小池上 惇)	8
漢点字と私 (補遺) (岡田 健嗣)	10
ご報告のご案内	17
漢文のページ	21
平野久美子と短歌鑑賞	23



点字から識字までの 距離 (37)

(墨田区立緑図書館)

山内 薫



「漢字世論調査」

『月刊しにか』(大修館書店)

二〇〇三年四月号が「日本人にとって漢字とは何か」という特集を組んでいる。特集に合せて「漢字世論調査」―四七五二人の日本人の漢字意識―が行われているので、今回はこの調査報告を中心に紹介したい。この調査は二〇〇二年一月一五日から翌年一月一五日までの一ヶ月間、主としてこの雑誌を発行している出版社である大修館のホームページ上で行われた。

従って世論調査とは言っても回答者の大半はもともと漢字に興味を持っている人でインターネットを利用して回答したと見てよいだろう。

年代を四区分してとっているのが面白く、二五歳以下は常用漢字制定以降に学校教育を受けた年齢層(九三二人、二〇%)、二六歳から六五歳は当用漢字時代に学校教育を受けた層で、この層は人数が集中しているので二分し、二六から四五歳(二七三九人、五八%)と四六歳から六五歳(九五一人、二

〇%)に分けている。六六歳以上(八五人、二%)はそれ以前に学校教育を受けた層となる。インターネットを行っている人の数自体がこの人数に反映されており、六六歳以上は非常に少ない。

設問二「あなたは、小学校・中学校のころ、漢字が好きでしたか、きらいでしたか?」では、「大好き」二・一%、好きな方四三・六%、あまり好きではなかった三一・一%、大きらい五・二%、覚えていない七・三%と、好き系が五五・七%ときらい系の三六・三%を上回っている。

設問三「あなたは、小学校・中学校のころ漢字を学習したことが、今の自分の役に立っていると思えますか?」では、「とても四五・七%、少しは四七・五%」と、九三・二%という圧倒的多数が役に立っていると回答している。

設問四は漢字に対する印象を一五の質問によって聞いたもので、上位三つは「正式な文書を書くときには、漢字が多い方がかっこよく見える気がする。(五〇・一%)、四字熟語などのように、少ない文字数で多くの内容を表すことができて効果的(四九・八%)、知らない文字・熟語でも、知っている漢字から



類推が効くことがあつて、便利。」で、半数が挙げて
いる。

反対に少ない回答は「難しい漢字を苦勞して覚えて書くよりもひらがなで書く方が効率的だ。(四・六%)、『和』を『ワ』やわらぐ』なごやか』と読むように一つの文字に複数の読み方があるので実用的でない。(五・二%)、漢字を覚えるより、英語を勉強する方が役に立つ。(五・六%)、『過程』『家庭』『仮定』など、同じ読みをする熟語が多くて、不便。(九・八%)」など、漢字に対する否定的な質問については少なくなっている。

否定的な質問で比較的多いのは「画数が多くて形が複雑なのでめんどくさい。」が一八・七%で、漢字が大嫌いな人では五三・四%にものぼり、「書くときに、筆順や止め・はねなどがあるので、めんどくさい」も一八・一%と二割近くの人が感じていることが分かる。この点編集部では「漢字ぎらいの要因として字形の複雑さがあると推測されます。」と分析している。また、「漢字を知っておかないと、なんだかばかにされる気がする。」という人が三七・四%もいた。

設問の五も一五の質問によつて、自身の経験にあてはまるものを聞いている。最も多いのは「最近一年間に、わからない漢字を漢和辞典で調べたことがあ

る。」で六八・三%、次いで「わからない漢字に出会うと、その形や構成から意味がだいたいわかるような気がする。」五一・〇%、『追求』『追究』『追及』などの同音異義語の使い分けに、迷ったことがある。」四九・九%、「漢字の字源に関する話を読んだり聞いたりして、興味を惹かれたことがある。」四五・八%、「前から知っている漢字を書こうとしていたのに、それが急に間違っているように感じられてきたことがある。」四二・四%、「コンピュータで使える漢字がもっと多ければいいのに、と思う。」四一・一%などがあがつている。

設問六は「漢字を使うか、ひらがなを使うか」を六つのことばについて聞いている。六語について見ると次のようになる。

- (一)「もちろん」六六・二%、「勿論」一四・七%、
「こだわりなし」一八・一%
- (二)「せっかく」六八・六%、「折角」一五・〇%、
「こだわりなし」一五・三%
- (三)「いわゆる」七七・七%、「所謂」七・二%、
「こだわりなし」一三・六%
- (四)「よほど」五二・七%、「余程」二八・九%、
「こだわりなし」一六・六%
- (五)「そのとき」五九・九%、「その時」八四・一%、

こだわりなし八・七%

(六)「できごと」六・三%、「出来事」八二・六%、
こだわりなし九・九%

この中で例えば「所謂」を見ると、二五歳までが七・二%、二六〜四五歳が五・二%、四六〜六五歳が一・三%、六六歳以上が二五・九%と高齢層ほど高くなっている。

しかし、二六〜四五歳よりも二五歳までの方が二%高いという結果は、より若い層が、手で漢字を書かなくなり、パソコン・ワープロでものを書く機会が増えたために、ワープロの指示した漢字を使うようになってきた事の現れではないかと思われる。



一方「その時」と書く人は、二五歳までが八三・六%、二六〜四五歳が八四・八%、四六〜六五歳が八五・六%、六六歳以上が七八・八%と、どの年代でもほとんど変わらない。

設問の七は、漢字表記に新字体と旧字体のどちらを使うかという質問で、例えば「街の灯」(九一・一%)と書くか「街の燈」(三三・四%)と書くか、「灯火」(六五・二%)か「燈火」(一七・〇%)か、「富岳百景」(二一・五%)か「富嶽百景」(六六・四%)か、

「山岳地帯」(九二・八%)か「山嶽地帯」(三二・二%)か、「曾祖父」(五六・五%)「曾祖父」(三四・〇%)、「木曾」(八二・六%)「木曾」(二二・四%)などが挙がっている。「昇り竜」(三六・八%)と「昇り龍」(五二・六%)、芥川竜之介(五・七%)と芥川龍之介(九〇・九%)ではいずれも旧字体が上回っている。このことから新字体を使うか旧字体を使うかは、それぞれの語に依存しており、特に固有名詞では一般に目にする文字が優先的に使われているようだ。

漢字にするか仮名にするか、という選択はほとんど個人に任されている訳だが、設問の四にあったように、正式な文書を書くときには、漢字が多い方がかつこよく見える気がする、という人が半数を占め、文字を書くのにパソコン・ワープロを使う人が増加していけば、もしかすると今後漢字の使用率は増えていくのではないかと思われる。

そこで問題となるのは誤用の問題であろう。同誌の論文(「パソコンと漢字表記の実態」)で、紀田順一郎は次のような指摘をしている。以前に比べてワープロ・ソフトの変換効率は「共起情報(例えばセミは『鳴く』、赤ん坊は『泣く』というように前後の語彙との関連で同音異義語を判別すること)」が採用された

ことよつて、飛躍的に向上した。また最近では方言や文語にまで対応したり、行政地名などへの対策も盛り込まれ、支援機能が充実してきている。「しかし、じつは変換候補が増えた分、かえつて選択ミスが多くなったともいえるのである。差し引きプラスかマイナスかということだが、とどのつまりはワープロの機械的な進歩に見合うだけのか『国語力』の向上があつたか否かであろう。ワープロ辞書は、基本的な国語力の不足までカバーしきれないのである。」と述べている。

さらに不注意による変換ミスにとどまらず、基本的な表記への無関心が読み取れる、としてホームページ上で最も多い次のようなミスを挙げている。(括弧内が正しい用い方)

跡を絶つ(後を絶つ)、週間誌(週刊誌)、人生感(人生観)、晴天の霹靂(青天の霹靂)、前後策(善後策)、荷ない手(担い手)

また、同音異義語の混用として

愛惜(哀惜)、検診(健診)、自認(自任)、修行(修業)、青年(成年)、直感(直観)、野生(野性)等々多くの例を挙げている。

前回読めないけれども書くことはできるといふ失

読症について報告したが、キーボードを叩くだけで身体を使って文字を書くことがますます減少していく、ということや、光学的な画面を通して読むということが増えていったときに、日本語、そして漢字はどのように質的に変化するのか考えてみるければならないだろう。



私とボランティア活動、

漢点字について(後半)

平瀬 徹

漢点字との出会い

「何だこのお化け点字は！ 八点もあるじゃないか」それが私の漢点字に触れた第一印象でした。

一般に使用されている日本点字は、ひらがなとカタカナの区別もない表音文字です。そのため、文節分ち書きという難しい文法を点訳ボランティアは覚えなければなりません。しかし、いくらか分ち

書きしても、同音意義語、著者がどこを漢字にし、どこをカナにしたかは伝えることができないのです。そこで創案されたのが漢点字です。

漢点字を書くためには八点打つことができる点字器が必要です。小型の懐中定規は販売されていますが、とても書きにくく、またその割に高価でした。そんな状況では漢点字を普及させることはできません。ならば作つてしまえ、学生にはとくに安く頒布しよう、というのが当時の六つ星会点字出版部長の堀場信昭さんのお考えだったようです。

漢点字板を世に出すまでには、いろいろ試行錯誤がありました。私が入会したのはもう最終段階だったと思います。点の出がどうかいろいろ文句を言ったり、拘りながらヤスリで削るお手伝いもさせていただきました。そして完成した一号機を、今も愛用させていただいています。

漢点字を勉強して「時計とは時を計ると書くんだ」なんて、晴眼者からすれば当然のことに感動したり、「土産」という文字はその土地で生産されたものだからこんな字を書くんだとか、浴衣はお風呂上がりに着るものだからこんな文字を書くのかとか、感動の連続でした。



今鍼灸治療のためにカルテを作るのに「ひろこさんという方がいらつしやると」「弓偏にムの弘です」「三水に告げるの浩です」とか言われますが、漢点字を勉強していなかったら全く分からなかったことでしよう。

全盲なら、だれでも墨字を書きたいと思うでしょう。代筆してもらおうと思うと、家族にしる友達にしる、相手の手が空いたときを見計らつて頼まなければなりません。

そんなこともあつて、カナタイプライターが使用されてきました。もちろん自分で打った文字は確認できません。「あ、間違えた」と思つたら一文字戻してX印を入力して続きを書きました。郵便番号も、封筒やハガキの枠が真つ直ぐではないのですべて真ん中にとは行きませんが、一応枠内に収めることができました。

ところがところが、点字を覚えることを挫折した母親ときたら「カタカナばかりじゃ郵便屋さんが読みにくいから、何とか漢字で書けないか」と。鍼灸院に勤め



て最初の給料で買ったのがZECのPC6601というパソコンでした。それに木でできた手作りキーボードを接続して、漢点字直接入力で最初に書いた家

族への書き置きは「患者さんと飲みに行つてきます」でした。

父が下戸なので、家では晩酌の習慣はありません。しかし、鍼灸師会ではある程度飲めないと晴眼者の業者との親睦に支障を来たすので、少しずつ練習をしていました。でも、私がまあまあ酒席につき合えるようになったのは、漢点字やパソコンのせいだったのか、そのころからよく飲みに誘ってくれるようになった患者さんのおかげだったのか…。

パソコンをPC6800に換えたころ、ハム仲間が「近くに來たらひらせ鍼灸院の看板があつたから」と寄つてくれました。そして「お、ここにはパソコンがあるんだな。これから少しずつフリーソフトを持つてきてやろうか」と言つてくれて、それからパソコンをワープロ以外にも使えるようになりました。

パソコンのマニアルは難解です。それで、私がハム仲間に読んでもらつて私がそれを「多分こういう意味じゃない？」と噛み砕いて説明する。そして一緒に実験してみる。そんな持ちつ持たれつの関係でパソコンの勉強をしてきました。周辺機器も一緒に買うからと値切つて買ったこともあります。私のパソコンのハードディスクがクラッシュしたとき、夜中にも関わらず高速道路を飛ばしてサポートに来てく

れた友人もいます。

私はパソコン教室に通つたことはありません。漢点字の雑誌などでソフトの解説をさせていただったり、ソフトハウスから頼まれて視覚障害者用ソフトのモニターをさせていただいたりする関係で、相談のメールや電話をいただくことがあります。点訳ボランティアの方からも、ソフトのインストールや環境設定などの相談を受けることがあります。

でも、それらはすべて晴眼者の友人からの受け売りです。

私たち視覚障害者は一歩外に出れば、道を尋ねたり時刻表を見ていただいたり、周囲の晴眼者の方に目をお借りすることが多いのです。点訳ボランティア活動もパソコンサポートも、何か社会へのご恩返しになればと思つてさせていただいています。

ある程度パソコンを使えるようになると、自分がどれくらいレベルなのか客観的に評価してほしくなりました。それで、カナタイプやワープロの競技会にはよく出ていました。

点字の漢字には、漢点字とは別に六點漢字という方式もあります。アビリンピック（障害者技能競技大



会)に最初に出たとき、私は二人の六点漢字ユーザーに負け、銅賞でした。録音タイプライターで、会議のテープ起こしを職業にしているプロに負けたので当然といえば当然なのですが、それでも悔しかった。

それならということでも六点漢字も勉強してやろうじゃないかと思ひ、鍼灸院のお正月休みに一気に勉強しました。漢点字は偏と旁、冠と足という組み立てになつてゐるのに対し、六点漢字は音と訓の頭文字でできているのがあります。

先天旨にとつては六点漢字のほうが親しみやすいのですが、実際は音と訓で表現できる漢字は少ないため、音と部首符号でできているもののほうが多いのです。

私は最初に漢点字で部首の概念が分かつていたので、漢点字の符号を六点漢字の符号に置き換えるだけでマスターできました。しかし、先に六点漢字を勉強していたら、点字の漢字は使えていなかったような気がします。

翌年のアビリンピックは県内予戦落ちでしたが、その次の一九九六年は国内大会で金賞を受賞でき、二〇〇〇年にはプラハで行われた「国際アビリンピック」にも参加することができました。



自分は何もできないくせに、母は私が競技会に出るのが大好きです。家の引越しのときも、どうせ家においても邪魔になるだけだからと私はカナタイプの競技会に参加し、引越しが終わったところにトロフィーを抱えて帰ってきました。

アビリンピックは国内大会も国際大会も視覚障害者は介助者を一人つけてもいいということで、母と一緒に参加しました。母の一番の楽しみはバイキングの食事だったわけですが、でも、母はけっこう度胸があつて、プラハでも周囲の人の分まで生ビールを抱えて帰ってきました。「Four members」と言ったのがちゃんと通じたと喜んでいました。私にとつても母にとつても初めての海外旅行、少しは親孝行になつたかもしれません。

「平瀬さんにとつてパソコンは趣味なんですよね」こんなふうによく言われますが、私にとつてのパソコンは目の代わりであり鉛筆代わりです。必要に迫られて使うようになりました。

一時、視覚障害者の点字離れが叫ばれましたが、点字ペンディスプレイや点字プリンターが普及するにつれ、またインターネットで点訳データを入手できるようになり、点字が見直されるようになりました。紙に出力してしまうと点字は嵩張りますが、フ

ロツピーディスクやハードディスクに保存すれば必要などころを検索するのも便利です。ただ、せっかく点訳して下さった点訳書を音声で聴いて満足してらっしゃる方が多いのは残念です。やはり点訳書は指で読みたいものです。

EBRW形式の点字のデータが漢点字の標準フォーマットになれば、ますます漢点字人口が増えるのではないかと期待しています。

左は、前号まで漢方と鍼灸についてご執筆下さった、栃木県立盲学校教諭の小池上惇先生が、校内で、進路指導についてお話になられたことをまとめられたものです。



進路指導について



小池上 惇

進路指導は生き方の指導だといわれています。最終的には、本人が決定するものですが、両親の

役割は重要です。

そこで、今日は私の進路選択における両親との関わりについて話したいと思います。

私は、生まれつき目が見えなかったので、両親は、私の小さい頃から将来について考えてくれたようです。四歳の頃、近くの先生から琴を習わせてくれました。ところが、幼かった私にとっては琴を弾くことも遊びの一つでしたので、ある程度上達するとそこで満足して飽きてしまいました。就学時になると入学先が問題になりました。

当時、東京都武蔵野市吉祥寺に住んでいましたので、都立八王子盲学校が通学区域でした。が、母は私の将来のことを考え、東京教育大学（現筑波大学）付属盲学校への入学を決意しました。吉祥寺から文京区にある付属盲学校への通学時間は片道一時間半、しかも満員電車に乗っての通学は小学一年生にとってかなりの負担となりました。

そこで、両親は私の通学のために母親の実家に近い上十條に引っ越しました。そのお陰で、通学時間は約半分になり、とても快適な学校生活を送ることができました。

小学生の頃は、両親がよく勉強を見てくれましたが、私が特に感謝してい



ることは、母が点字を覚えてくれたことでした。直接点字の指導を受けたわけではありませんが、良い本があると点訳してくれたり、トランプに点字を打ってくれたりして私に関わってくれました。

当時の盲学校の高等部には理療科と音楽科しかなかったもので、中学から高校への進学の際は迷うこともなく理療科へ進みました。

両親は、私が理療科へ進むことはあまり望んでいませんでした。理療以外の仕事での自立の道を願っていましたので、琴の次はピアノ、英語とつぎつぎに習わせてくれました。けれども、「親の心子知らず」で、琴もピアノも楽しめる程度に弾ければよいという考えから、あまり熱心には取り組みませんでした。今思うと、両親には申し訳ないことをしたものです。



それでも、私が理療科へ進学すると両親は積極的に応援してくれました。やや実技が苦手だった私のためにあんまの練習台になったり、鍼の練習のために祖父・祖母・叔父・叔母などに練習台になることを頼んでくれました。お陰で、人並みに技術も上達しました。

こうして、理療科から理療科教員養成施設に進学し、今から三十五年前卒業と同時に本校へ就職することができました。

就職の際、両親がもつとも心配したことは人間関係でした。

「自分でできることはなるべく自分でやると、できないことは素直に認めて手伝ってもら代わりに、何か手伝えることがあるときは労を惜しまず他人にしてあげること、人に対する思いやりと感謝の気持ちを忘れないこと」を教えてくださいました。

家族をはじめ周りの大人たちから大切にされ、いつも誰かと一緒だったので、就職してからの一人暮らしでは随分困ったこともありましたが、けれども、周りにはいつも優しく楽しい人たちがいました。

両親が、就職する息子に教えてくれた「素直な心、努力、思いやりと感謝」が今も私の生活の基盤になっています。



漢点字と私 (補遺)

横浜漢点字羽化の会 岡田 健嗣

前号で、日本漢点字協会の機関誌、「新星通信」(第五十五号)に寄稿した原稿を転載致しましたが、今回も、それに引き続き筆を執ってみました。再度転載させていただきます。なお本稿は、同誌十二月発行の、第五十六号にご掲載いただく予定です。同会のご厚意に、深く御礼申し上げます。

E I B R K W S

＜カナポイント＞

「新星通信」第九十五号(平成十五年八月十日発行)に、拙文『漢点字と私』を寄稿し、ご掲載いただきました。

そこでは、視覚障害者と文字の現状、私と漢点字の出会い、そして私と羽化の会の活動について述べました。とりわけ本会で開発した漢点字変換プログラム、

E I B R K W S のご紹介に、かなりの行を割きました。

その後、お読み下さった方からのいくらかの問い合わせとともに、日本漢点字協会の「記号検討委員会」のまとめた点字の記号との相違点を明らかにするよう、ご要望をいただきました。この文は、再度紙面をお借りして、それにお答えしたいと考えたものです。このような我が儘をお許し下さった会長並びに編集部の皆様にも、深く感謝申し上げます。



E I B R K W S の概要

(一) 総説



a. 漢点字の文書は、従来のカナ点字のそれとは異なっており、一般の文書を、点字に置き換えたものと理解されます。従って、一般の文書(文字、記号、レイアウトを含む)を、可能な限り、点字の文書に置き換えられるべく、工夫・検討がなされなければなりません。従来のカナ点字の表記は、全てを音だけを表すカナ文字で表すもので、そのために、文節ごとの分かち書きを基本とします。しかし、漢点字による漢字仮名交じり文では、記号の点字符号の他は、むしろ一般の墨字文のルールに則って表記されます。

b. E I B R K W S の記号は、可能な限り、カナ点

字の体系に準じました。従来の点字の記号は、欧米の点字のそれを移入しながら、日本語で使用されるものに当てたもので、しかも、できるだけ極少に制限したものです。その数の少なさは、読み易さに通じるものがある、多くの視覚障害者に受け入れられて来ました。EIBRKWでは、その読み易さが、最重要と考えました。

c. EIBRKWは、コンピュータを使って、テキスト・ファイルから変換して、漢字仮名交じり文を作成するプログラムです。従って記号の類も、「USコード」に規定されているものを、点字の符号に変換するのが、主な機能です。カナ点字の体系の記号の数が極めて少なかったために、「USコード」に規定されていても、カナ点字の体系にはない記号も出て来ました。それらは、時間をかけて、できるだけ支障・混乱のないよう、また読み易さを最優先に検討しました。

(二) 文字およびその表記



a. 点字の漢字体系は、川上泰一先生創案の、「漢点字」を採用しました。残念ながら他には漢字を表現する点字の体系は存在しないため、比較検討はし

ておりません。「六点漢字」は、文字としての要件を満たしていないため、検討から除外しました。

b. 点字のカナ文字は、石川倉次先生創案の、従来のカナ点字の体系を採用しました。

c. 従来のカナ点字の体系の表記法との相違は、以下の通りです。

① 漢点字を採用して、漢字仮名交じり文を表記する。

② 分かち書きはしない。

③ 原則として行頭と行末を揃える。カナ点字の体系と異なり、行末は、単語の切れ目での改行はしない。

④ 助詞の「は、へ」は、カナ点字のように、「わ、え」とはせず、通常通りに表記する。

⑤ 才列・ウ列の長音は、棒引き仮名遣いをせずに、一般と同じく「う」で表す。

⑥ 拗音・特殊音は、カナ点字の体系の表記に準拠する。ただし、歴史的仮名遣いでは、原文の表記に従う。

⑦ カタカナは、カナ点字を「⠠⠠⠠⠠⠠⠠」で挟んで表す。この符号を「カタカナ符号」と呼ぶ。

E I B R K W における記号



(一) ここで言う「記号」とは、当面、J I S C 1ド二〇〇〇番台に規定されているものを指すことにします。当面と言いますのは、「記号」というとき、本当は何を指すのか、大いに難しい問題を含んでいるからです。

例えばこの文中にも、アルファベットや数字を、区分標として使用していますが、この場合、「文字」というよりも、「記号」としての使用と認められます。

しかし他方これらは、「文字」の使い方の一つとも見られて、使用上からの区別は、必ずしも明確とは言えません。同様に、「記号」と区分されるものも、文中にあつて、多様な意味を表すことがあります。すなわち、「文字」と「記号」は、用途や意味で区別される、カテゴリーを異にするものではなく、それを見る位置によって、「文字」と見えたり、「記号」と見えたりするものであるからです。

従つて、ここで「記号」というときは、単に、「一」のコード二〇〇〇番台の、カナ文字、アルファベット、ギリシア文字、ロシア文字を除いたものを指す、ということにします。

これらの記号の働きは一樣ではありません。「文字」とは違うというだけで、便宜上一つにまとめられているのです。

そこでE I B R K Wでは、これらを大きく二つに大別しました。一つは「文章記号」、もう一つは「その他の記号」です。

いかにもいい加減な分類ですが、これらの記号の性格からは、これが妥当なものと考えています。

(二) 「文章記号」とは、文の中にあつて、その文の構成要素として、欠かせないものを指します。その中には「、」。「。」。「？」。「！」といういわゆる句読点の他に、「・」。「／」。「…」。「〜」や、「棒線、傍線、傍点、各種繰り返し符号」などが含まれます。もう一つ、「「」」、「（）」、「（）」のような括弧の類があります。ここでは前者を「句読符号」、後者を「括弧の類」と呼ぶことにします。

a. 「句読符号」は、文章の区切り符号として、その文章の交通整理の働きをします。E I B R K Wでも、最も重要な記号として、優先的に規定しました。ほとんどが、カナ点字の体系に準じています。

ただし、「／」は、カナ点字の体系では「や」と同じ点字符号「ヨ」としてありますが、分ち書きをし

ない漢点字文では、判読不可と判断して、「」と、六の点を前置しました。「」は、カナ点字の体系でも、その用途によって二つの点字符号が用意されていますので、EIBRKWでも、「」と「」の二つを用意しました。

また、「棒線、傍線、傍点、各種繰り返し符号」は、カナ点字の体系には規定されてありませんので、EIBRKWでは、新たに設けました。

b. 〈括弧の類〉は、〈引用符号〉と、〈括弧〉に大別しました。

しかし、一般にはこの大別は明確ではありません。そこで、カギ括弧「」、山括弧「」とそれに付随するものを〈引用符〉と捉え、残りは〈括弧〉と考えることにしました。

実際には山括弧「」が〈括弧〉のように使用されたり、括弧のどれかが〈引用符〉として用いられたりしていますので、この分類は「便宜上」に過ぎません。

〈括弧の類〉の点字符号は、LOWER 4 (下の四つの点) 一つか、開き記号の場合、それに五・六の点の何れか、あるいは両方を前置することで表すことになりました。

これは、瞬時に他の記号や文字と区別できるようにするためです。

c. 〈括弧の類〉に含まれるもので、カナ点字の体系にないものに、〈ルビ符号〉があります。これはカナだけの表記では、そも必要のないものだからです。EIBROSZMの開発に当たって、最初期にぶつかった、点字符号の選択の困難でした。当時の漢点字文の表記には、ルビは、() に括って表されました。

しかしそれでは本来の括弧はどうするか、ルビと括弧は区別できなければいけない、私たちはそう考えました。

そこで思い切って、全く新しい考えを導入しました。本来漢字を表すだけに使用する、始点・終点のうち、「 (終点)」を例外的に用いて、〈ルビ符〉の開きとし、閉じはスペースとしたのです。

案ずるより産むが易しで、使い始めてから十年になろうとしています、本会の読者の皆さまからは、ご支持いただいております。

(三)

〈その他の記号〉は、〈単位記号〉、〈伏せ字〉、〈文章マーカー〉に大別しました。

a. 〈単位記号〉は、ほぼ従来のカナ点字の体系のそれを踏襲しました。

その中でも一つ「パーセント」だけは、アルファベットの「p」と同じ「」の形であることに疑問を抱いて来て、外国語の点字の中に参考になるものはないかと、手元にある資料から、英語では「」、ドイツ語では「」を見つけました。

これを見ますと、ドイツ語の記号は、墨字の形に近いものにしてあるところから、有望に思われたのですが、実際に触読のテストをしてみますと、英語の方が、はるかに読み易いことが分かりました。

そこでEIBRKWでは、英語の「パーセント」の記号「」を採用し、「パーミル」は、「」としました。

また「矢印」は、「」、「」を採用して、棒に「」を付けることで、それを長くすることができるようになりました。

b. 〈伏せ字〉は、カナ点字の体系の符号を踏襲していますが、変換元の「」のコードの選択には、やや工夫しました。特に点字には「」という概念がありません。墨字の文で通常行われている「」は使えません。そこでEIBRKWでは、〈伏せ字〉の「」に、「」を当てることにしました。

c. 〈文章マーカー〉は、墨字の文章中にあって、

マーカーとして働く記号です。「○、□、△、▽、◇」がよく用いられます。この記号は、視覚的なタブレター、あるいはインデックスとして機能します。

EIBRKWでは、一応これらの記号に当たる点字符号を用意しましたが、触読には決して勧められる記号とは思われません。

墨字の文には、空白を嫌う傾向が強くなります。むしろ空白には、過剰な意味が生じると受け止められています。そのために墨字の文、現在の新聞の文などには、色々なマーカーが挿入されています。

一方点字は、欧米からの移入という歴史もあって、分ち書きが一般でした。空白をうまく利用して、点がアルカナイカという、最小限の区別で、瞬時に理解し得る符号を開発して来ました。

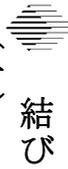
その意味で、墨字の〈文章マーカー〉を、『ビジュアル・インデックス』（視覚的指標）と理解して、それを漢点字文に反映するために、『タクチュアル・インデックス』（触覚的指標）とも言い得る記号を編み出して、置き換えることが必要と考えます。

その最もオーソドックスなものが、何でもない「空白」と考えています。その他、文脈に沿って、

括弧、中点、波線等を、適宜当てて、その表記を達成できるのではないかと考えています。

d. 付記として、b. で少し触れましたが、「×(バツ)」のように、墨字では文字と同様に使用される記号がありますが、点字にはその概念すらないものがあります。それらは、カナで表記することになりました。

ここでは、これに加えて「メ切り」という場合の、「メ」を挙げておきます。この記号もカナに換えて、「しめ切り」と表記することになりました。



結び



(1) EIBRKWの基本的なコンセプトは、一般の、墨字の文書を、触読し得る、漢点字仮名交じり文に変換して、編集・印刷するところにあります。その目標は、高等教育上必要とする資料、あるいは大学の教養課程で使用される資料を表すところに置きました。約三年前に、漢文訓読の訓点の表記を完成して、それはほぼ達成されたと考えています。

従来の点字は、カナ点字の体系でしたので、本来の日本語を表す文書からかけ離れたものになって行きました。点字は点字の世界を形成して、文字も記号も、墨字のものとは異なった意味を持つようになりまし

た。点字と墨字の距離は、益々大きくなって、計り知れないものになりました。

川上先生が、漢点字をお作りになって、私たちに与えて下さいました。私たちはそれを学んで、使って、伝えて行こうとしました。EIBRKWはそのようにして誕生したのです。

漢点字は、墨字の文を、私たちに大変近付けてくれました。にも関わらず漢点字は、一方、一般の墨字の文書とは異なった、触読し易いレイアウトを求めて来ました。EIBRKWのコンセプトは、このような緊張の中に成立したのです。

(11) EIBRKWは、元来テキスト・ファイルを漢点字ファイルに変換して、編集するためのプログラムでした。長ずるにつれて、ピンディスプレイへの送付や、音声への送付もできるようになって、現在では、〈漢点字エディタ〉と呼んでも過言でないほどに機能が充実して来ました。

私はこのプログラムを、まず、読書器として利用していました。本会のボランティア会員が入力・校正して下さったテキスト・ファイルを、編集する作業を通して、次第に新しい読書法、これまでにはなかった読書法に、気付かされたのでした。近い将来、その方法を分析し、ご紹介する積もりですが、ここに一

言だけ申し上げておきます。

視覚障害者は、視覚を失った者です。視覚を失った以上、他の感官を総動員して、何事にも対処しなければなりません。とりわけ聴覚と触覚は、対をなして、欠けた視覚を補わなければなりません。

読書においても同様に言えると考えます。すなわち、触読と同時に、耳で聴く。コンピュータが、それを可能にしてくれました。私が使用しているスクリーン・リーダーは、`XP`リーダーです。`EIBRW`もそれに対応しています。`XP`リーダーには、漢字の読み上げに、幾つかのモードが用意されています。

私は手製の、漢字の意味を説明し、漢点字の符号を読み上げてくれるデータを入れて使っています。このデータは、ピンディスプレイの触読とともに、私の読書に、大変大きな力を発揮してくれます。

これまではとかく、点字は指で読むもの、音訳は耳で聴くもの、それらは別の行為だとして、同時にすることは、我が儘な、贅沢な、何か後ろめたさを伴った感覚をもたらしました。

しかしそれは全く杞憂で、むしろ、聴覚と触覚を同時に働かせることが、読みの理解を、倍増させることを確信したのでした。

(11) `EIBRW`はテキスト・ファイルから漢

点字データへ変換するプログラムです。そのために、よく行われている点字直接入力は、検討の外にありません。

私のコンピュータとの付き合いは、ご存じの方が多いチノワードから始まっています。その後、`MS-DOS`、`WINDOWS`と変わって来ました。

それは別の角度から見れば、点字直接入力からローマ字変換への、変化のプロセスでもあります。これはあくまで私感ですが、点字直接入力をしているときは、漢点字と言えども、コンピュータで墨字を書いているという感覚はありませんでした。むしろ点字を打ち込んで、それをコンピュータが自動的に墨字に換えてくれる、そんな風を感じていました。

ところが、ローマ字入力を行うようになると、自らの手で、墨字を書いているという手応えが感じられるようになって来ました。決して点字直接入力を否定するものではありませんが、将来はともかく、これまで`EIBRW`のコンセプトにそれが盛り込まれなかったのは、そのような理由によるものです。

漢点字電子データ・`EIB`ファイルとともに、お一人でも多くの方に、`EIBRW`をご愛用いただけることを願って止みません。



報告と案内

一 漢点字講習会について

この六月一五日に第一回を開催した漢点字の講習会、早くも四ヶ月が過ぎました。

先月九月一五日に、第二回目のスクーリングを行いました。

ご都合で欠席された受講者もおられました。皆様、大変熱心に取り組んでおられる様子に、胸を打たれる思いでした。学習は、通信制を採っておりますので、受講者お一人お一人のペースが大事になります。

テキストは、現在三回目の分を製作しています。その概要は、

(一) 初級編、中級編の二部構成…初級編では教育

漢字を、〈基本文字〉から始まる漢点字の構成に従ってご紹介します。中級編では、初級編に盛り込まれなかった〈基本文字〉と、その他の



常用漢字を、漢字音に従ってご紹介する予定です。

(二) 全二〇回…初級編、中級編、ともに一〇回を予定しています。

(三) 各メディアに対応…現在、点字版、墨字版を製作しておりますが、受講を希望される方からのご要望もあつて、音訳版を製作していただいております。また、(株)SGS社製のBZシリーズ向けの、閲覧専用BZ用ファイルでの提供も検討しております。

(四) カナ点字から漢点字へ…点字版のテキストでは、当初は、カナ点字で表記されますが、出現した文字を、それに従って、本文に繰り込んで行きます。墨字版では、漢字仮名交じりの表記の中に、出現した文字を、墨点による点字符号で表して行きます。

(五) 内容が高度…ご覧になった方の

感想では、「むずかしい」というお声が多く聴かれましたが、点字の資料を数多く作ることは困難ですので、講習を終了した後にも、簡易な漢字の辞典としての機能を持た



せたいと考えて編集しました。その中には、漢字の音と訓、その字形、文字の意味、漢点字の符号とその意味、熟語による使用例を収録しました。その後、地方の方からの受講希望が寄せられています。何時始めてもよいものですので、どしどしお申し出下さい。



二 日本テレソフト製の 点字プリンターが、 漢点字標準装備へ

株式会社・日本テレソフト（東京都千代田区）は、福祉機器の開発・販売の事業を展開しております。

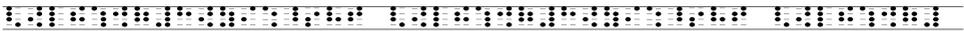
かつて東洋ハイブリッド（株）が製作した点字プリンター二機種を引き継いで、また独自の点字プリンターも、年頭に発表されました。

これら三機種の点字プリンターに、漢点字出力を、標準装備したいというお申し出が、同社から寄せられ、本会開発の漢点字変換プログラムEIBRSMに対応することになりました。

漢点字のデータが点字プリンターに、標準的に搭載されることは未曾有のことです。

実現すれば、漢点字をめぐる環境は、一変するものと思われます。

株式会社日本テレソフト



b. TPW32 :
両面同時高速印字



価格：1,800,000円

a. TP32 :片面高速印字

片面ずつの印字によって、
両面印字も可。



価格：960,000円

以下、同社のプリンターをご紹介します。

c. DOG-MULTI :

片面高速印字

片面ずつの印字によって、
両面印字も可。
点字の行間に墨字の印字が
できるのが特徴、資料の共
有を目指しました。



価格：1,300,000円

(以上二機種は、東洋ハイブリッドから引き
継いだもので、極めて静かな、安定した印
字に定評があります。)

三 名古屋でボランティア

の交流



本会のボランティアの代表を務めている木下が、去
る十月九日、名古屋を訪れました。
その折りのご様子を、在住の平瀬さんがレポートし
て下さいました。

木下からも、コメントが届いています。

(前略)名古屋からは、はづき会、大樹会、ブレイルなかがわの3サークルから10人余りが参加、横浜漢点字羽化の会の木下さん、鳥取の高木さんにも加わっていただき、大変熱心に情報交換することができました。

私は少し遅れて10時半過ぎに福祉会館に着いたのですが、既に鳥取の高木さんがしっかり木下さんをGET!いろいろな質問をぶつけてらっしゃいました。

11時ころから、自己紹介の後、EIBRKWの使い方について木下さんに質問し、答えていただいたり、ノートパソコン持参でいらっしゃった方々のパソコンの設定確認などをしていただきました。

午後は、点訳室に移動し、漢点字プリントのデモを行いました。

漢点字の点訳者は真面目な方が多いけれど、漢点字の普及のためにはもっと柔らかくて読みやすい読み物や児童書の点訳が必要ではないかという声がありました。また、(日本漢点字協会の)記号検討委員会に対するご意見も頂戴致しました。

これからは、ボランティア同士のネットワーク、漢点字協会との結びつきを大切にして行くべきではないかという意見で一致しました。(後略)

大変有意義な会だったようですが、幅が広がったことも、吉報です。EIBRKWの活躍が、貴重な成果をもたらしたものです。このような交流が多く、困難が予想されますが、さらに機会を作って行ければと存じます。

ご連絡は、
E-MAIL: eib_okada@ybb.ne.jp
まで。

名古屋のボランティアグループの方には本当に多数のご参加をいただき、ありがとうございました。

(略)

高木さんは、持ち前の積極性を十分に発揮して、場の雰囲気盛り上げてくださいました。

それにしても、ESA721がちゃんと動いたのはよかったですね。とにかく、名古屋の点訳ボランティアの活動はすばらしく、そのための環境が非常に整備されていることに感心しました。何しろ点字プリンターの多いこと…。

(略)

お聞きしたところでは、漢点字も相当量の点字プリントをこなされているようです。

今回の交流会は、たまたま生じた別の目的(私の小学校の同窓会への出席)での機会をうまく利用して実現したのですが、平瀬さんのいうように、それだけを目的にして集まるというのもいいでしょうね。

楓橋夜泊

中唐 張繼

月 落 烏 啼 霜 滿 天

江 楓 漁 火 對 愁 眠

姑 蘇 城 外 寒 山 寺

夜 半 鐘 聲 到 客 船

月 落 ち 烏 啼 い て 霜 天 に 満 つ

江 楓 漁 火 愁 眠 に 対 す

姑 蘇 城 外 寒 山 寺

夜 半 の 鐘 声 客 船 に 到 る

・秋の夜の旅愁をうたつて、古くから親しまれた詩。

【楓橋】江蘇省蘇州の郊外にある橋。

【寒山寺】蘇州郊外にある寺の名。楓橋寺ともいう。

月は沈み、からすが鳴いて、霜の気が大気中に満ちわたっている。川岸のかえで、漁船のががり、火が、旅の憂いに寝つかれずにいる(わたしの)目にうつる。姑蘇の町はずれにある寒山寺から、夜半をつげる鐘の音が、この旅の船にまで響いてくる。



山行

晚唐 杜牧

遠 上 寒 山 石 徑 斜

白 雲 生 處 有 人 家

停 車 坐 愛 楓 林 晚

霜 葉 紅 於 二 月 花

遠く寒山に上れば石径斜めなり

白雲生ずる処人家有り

車を停めて坐るに愛す楓林の晩

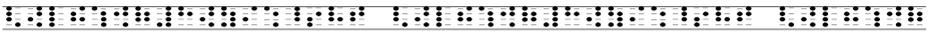
霜葉は二月の花よりも紅なり

【寒山】ひっそりともものさびしい山。秋の山をいう

【二月】陰暦の二月で、春のさかりの季節。

遠く人里離れたものさびしい山をのぼって行くと、石のこみちが斜めに続いており、(山上はるか)白雲のたちこめるあたりにも、人の住みかがある。車をとめて、何とはなしに心がひかれて夕ぐれのかえでの林を愛でながら眺めわたす。霜に色づいた葉は、(夕日に照らされて)春のさかりの花よりもいっそう赤い。

※ 遠藤哲夫『語法詳解 漢詩』(旺文社)によりました



楓橋夜泊

月落 ち 鳥 啼 イテ 霜 満 ツ

天 ニ

江 楓 漁 火 對 ス 愁 眠 ニ

姑 蘇 城 外 寒 山 寺

夜 半 ノ 鐘 聲 到 ル 客

船 ニ

山行

遠 ク 上 レ バ 寒 山 ニ

石 徑 斜 メ ナ リ

白 雲 生 ズ ル 處 有 リ 人

家

停 メ テ 車 ヲ 坐 ロ ニ 愛 ス

楓 林 ノ 晩

霜 葉 ハ 紅 ナ リ 於 ニ 月 ノ

花 ヲ リ モ

紅葉はかぎり知られず 散り来れば
 わがおもひ 梢のごとく 織しも



前川 佐美雄

今年の紅葉は冷夏の影響で余り良くないと伝えられています。

秋の楽しみがひとつ減ったようで残念です。

全山すべてが燃えるような紅葉、けれどそれは若葉が萌えたつ頃とは違い、どこかしんとした華やぎです。一枚また一枚、いいえ数限りなく木の葉は落ちてゆきます。「散り来れば」とあるので作者はその紅葉の散るただなかにいるのでしょうか。「わがおもひ」が具体的には判らなくても風景の中で思い(心)は澄みわたりほそく織くなってゆくのです。ほそいという字に繊細の織の字をあてる事によって深い秋空に残る梢の美しさが現われています。

歌とはことばひとつ漢字の選び方ひとつでこんなに違うものなのです。

ゆうされば 大根の葉に ふる時雨
 いたゝ寂しく 降りにけるかも



斎藤 茂吉

ゆったりとした一首の中にある寂しさは日本人の心の原風景のようにも思えます。

時雨とは晩秋から初冬にかけて降る雨のこと。冬に向って育てた大根畑一面に広がっているのです。

夕暮れどき時雨に濡れてゆく大根畑です。地面や屋根に降る音とは違った大根の葉に降る音を作者の耳はきき分けました。

聞き分けたことによって一層作者の寂寥感は深まります。

編集後記

《表紙絵 岡 稻子》

‘どき！’‘そうそう’日頃よりパソコンで書類等を作成している者にとって思い当たる場面が…。

漢字の変換したもの‘これであってるかな…?’周りの人に聞くとまちまちな答えが、辞書を引いて一同「そうなんだ！」正しい答えを出した人も不安を覚えるらしい。

何の話かって、失礼しました、山内さんの原稿を編集中、思わず苦笑い。漢字って奥が深く、難しいですね…! ?。

次回の発行は12月15日です。 宇田川 幸子

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載はかたくお断りします。

漢点字 講習用 テキスト

初 級 編 第1回 (全10回)

横浜漢点字羽化の会 2003年6月15日

第 1 回 (続き)

2 基本文字 (2)

第一基本文字 (2)

〈第一基本文字 (一マス漢点字)〉の続きを勉強しましょう。

(13) 金 𠄎 キン コン かね

黄金の意、まばゆく光っている形です。カネと訓読する場合は、おかねを意味します。また、最も大切なものの意にも用いられます。部首としては、金属の名前や、金属に関係する文字を表します。

「𠄎色」「黄𠄎」「𠄎星」「𠄎科玉条」「𠄎は天下の回りもの」

(14) 木 𣎵 モク ボク き こ

植物の木を象った文字です。部首として、木の名前、木を素材としたものを表します。

「樹𣎵」「𣎵材」「𣎵星」「𣎵肋𣎵」「並𣎵道」「𣎵場」「添え𣎵」「𣎵挽き」

(15) 草 艹 ソウ くさ

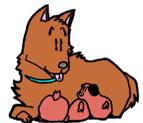
草の根と茎と葉を表した文字です。墨字では草冠の下に早の形ですが、漢点字では「𠄎𠄎」の形で〈草冠〉に用いられます。意味は、草、花、草を素材とした作物などを表します。

「𠄎原」「𠄎根𠄎皮」「𠄎書体」「民𠄎」

(16) 犬 犴 ケン いぬ

犬の姿を象った文字です。部首では、〈獸偏〉として、主に肉食動物を表します。漢点字でも同様に、〈獸偏〉に用います。

「忠𠄎」「盲導𠄎」「𠄎も歩けば棒に当たる」



(17) 子 𠂔 シ ス こ ね

身体の割に頭の大きな赤ちゃんを象った字です。音はシとともにスと読むことも多くあります。十二支のネズミの意味もあります。部首として沢山の文字に含まれます。

「孫」 「利 𠂔」 「椅 𠂔」 「扇 𠂔」 「供 𠂔」 「親 𠂔」 「𠂔 𠂔 𠂔」

(18) 都 𠂔 ト ツ みやこ

国の中心の都市です。この文字に含まれる部首は〈おおざと〉ですが、漢点字では、「𠂔 𠂔」（こざと）、「𠂔 𠂔」（おおざと）と、二つの働きをします。

「京 𠂔」 「東京 𠂔」 「合 𠂔」 「𠂔の西北」



(19) 市 𠂔 シ いち

ものを売り買いするために人の寄り集まる所です。各地にあるバザールや金融商品を取引するマーケットも含まれます。現在では行政区画の〈市〉の意味が強くなっています。

「場 𠂔」 「𠂔 𠂔」 「横浜 𠂔」 「場 𠂔」 「蚤の 𠂔」

(20) 発 𠂔 ハツ ホツ はな - つ た - つ

ものごとを始めるという意味です。漢点字では「𠂔 𠂔」、〈はつがしら〉に用います。

「出 𠂔」 「𠂔 𠂔」 「送 𠂔」 「育 𠂔」 「車 𠂔」

(21) 食 𠂔 ショク た - べる く - う

食物を口に入れてたべることです。部首では、〈食偏〉として用いられます。

「事 𠂔」 「外 𠂔」 「𠂔 𠂔 動物」 「べ物 𠂔」 「𠂔 𠂔 𠂔」

(22) 馬 𠂔 バ メ マ うま

動物のウマです。たてがみを靡かせて走る姿を象った文字です。部首では、〈馬偏〉として、交通や騎馬・軍事に関わる文字を作ります。

「荷 𠂔 車」 「競 𠂔」 「駿 𠂔」 「絵 𠂔」 「𠂔 𠂔 𠂔」 「𠂔 𠂔 方」 「縞 𠂔」



(23) 田 𠂔 デン た

綺麗に区画されたたんぼです。古く中国では、はたけの意味に

も使われました。部首として多くの文字に含まれます。〈田づくり〉では、農業に関わる意味を表しますが、必ずしも〈田〉の意味を表すとは限りません。

「水」 「地」 「畑」 「稻」

(24) 竹 チク たけ

植物のタケです。タケの枝が茂っている形を表しています。部首では、〈竹冠〉として、タケの名前や、とりわけタケを素材とした作物、多くは農具の名前に含まれます。

「竹の友」 「竹林」 「竹の」 「竹」



近似文字 (3)

(1) 未 ミ いま - だ ひつじ

「木」の〈近似文字〉です。漢文訓読で、「いまだ…ず」と読まれる文字です。また、十二支のヒツジの意味もあります。墨字では「木」の横棒の上に、短い横棒を加えた形です。

「熟」 「成年」 「完成」



(2) 末 マツ すえ

「木」の〈近似文字〉です。ものの終わりの方の意味があります。墨字では「木」の横棒の下に短い横棒を加えた形です。

「月」 「期」 「摘花」

(3) 本 ホン もと

「木」の〈近似文字〉です。「木」の根本に小さな横棒を交差させた形です。木の根の意味で、ものごとの根本、本質を表しています。また、書物の意味でも用いられます。

「質」 「根」 「日」 「日の」 「屋」

(4) 由 ユ ユウ ユイ よし

「田」の〈近似文字〉です。くびの細いツボの形を表しています。

「自」 「理」 「縁」 「緒」 「…との」

- (5) 曲 𠄎𠄎𠄎 キョク ま - がる ま - げる
 「田 𠄎𠄎」の〈近似文字〉です。「由」の縦棒が二本になった形
 です。まがる・まげるの意味から、音楽の曲想の意味になります。
 「灣 𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎線」 「樂 𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎阿世」
 「𠄎𠄎𠄎げ物」 「へそ 𠄎𠄎𠄎がり」



読みの練習 (3)

- (1) 𠄎𠄎曜日に会いましょう。
- (2) 法隆寺の 𠄎𠄎堂が有名です。
- (3) 𠄎𠄎物は電気を通す。
- (4) そこは材 𠄎𠄎置き場です。
- (5) 𠄎𠄎石のような人だ。
- (6) 大きな栗の 𠄎𠄎の下で。
- (7) 𠄎𠄎立の続く土地。
- (8) 畑の雑 𠄎𠄎を抜く。
- (9) 文章の下書きを 𠄎𠄎稿といいます。
- (10) 𠄎𠄎歯が抜けた。
- (11) 𠄎𠄎かきで泳ぐのは難しい。
- (12) 母 𠄎𠄎ともに健康です。
- (13) 𠄎𠄎 𠄎𠄎の立て替えをよろしく。
- (14) 女の 𠄎𠄎には 𠄎𠄎をつけた名前が多い。
- (15) 甲 𠄎𠄎と書いてきのえねと読む。



- (16) 大☺☺に住む。
- (17) ☺☺会の騒音がたまらない。
- (18) 昔、☺☺が京だった頃…。
- (19) 建築を☺☺街地に指定した。
- (20) 植☺☺☺が大好きです。
- (21) ☺☺明・☺☺見の歴史を探る。
- (22) ☺☺声と☺☺音の練習を毎日する。
- (23) いよいよ旅に☺☺つ。
- (24) 彼女は☺☺が細い。
- (25) 何でも☺☺べて☺☺☺気に生きる。
- (26) 大☺☺いは考え物です。
- (27) ☺☺力を出す。
- (28) ☺☺☺に乗ってみたい。
- (29) ☺☺☺とは牛や馬の飼料です。
- (30) ☺☺の耳に念仏の☺☺☺味は？
- (31) アラビアには油☺☺があります。
- (32) ☺☺んぼで☺☺植えをするのは初めてです。
- (33) 大きな☺☺輪を☺☺べる。
- (34) ☺☺の林で遊ぶ。
- (35) ☺☺☺知の世界に行きたい。
- (36) 新☺☺☺、☺☺☺だ完成せず。



- (6) こちらのぶきは、ぼくとうだ。
- (7) くさきもねむる、うしみつどき。
- (8) あきは、このはのまいのきせつです。
- (9) みずくさがながれている。
- (10) なまえもしらぬ、やそう。
- (11) あきたけんは、にほんのいぬです。
- (12) あれじゃあ、いぬじにですよ。
- (13) こうしとかろうしのしというのは、せんせいといういみなんです。
- (14) あっ、ぼうしがとんでった。
- (15) ぼうさんのもつ、ほっすははたきのようだ。
- (16) つまもこもあるわたしです。
- (17) ねのこくとはなんじのこと？
- (18) にほんのしゅとは、とうきょうです。
- (19) みやこどりとは、ゆりかもめのことです。
- (20) しみんのけんりをいしきしよう。
- (21) ぼろいち、いまでもやっていますよ。
- (22) うちゅうで、はつがのじっけんをする。
- (23) かれは、すでにたびだった。
- (24) にっしょく・げっしょくをみたいなあ。
- (25) パンダは、なにをたべるの？



- (26) ばんくいきょうそうにさんかした。
- (27) けんめいに、じょうばをならう。
- (28) まごにもいしょうですよ。
- (29) けいばじょうでばけんをひろった。
- (30) でんえんちょうふにあるいえ。
- (31) たんぼにひくみずで、みずあらそいがあった。
- (32) もうそうちくは、ふといたけです。
- (33) おむすびを、たけのかわでつつむ。
- (34) せんえんみまんならきりすてです。
- (35) そんなはなしは、いまだきいたことなし。
- (36) えとの、はちばんめは、ひつじです。
- (37) まっだいまでののはじだといわれた。
- (38) これでは、よもすえですね。
- (39) ほんとうにばかなことをした。
- (40) ひとつもとの、ゆずのきがある。
- (41) こうなってしまったゆえんは…。
- (42) じゆうにものがいえる。
- (43) そうなさったよし…おききしました。
- (44) ここまでくるには、うよきよくせつがありました。
- (45) まつが、まがってのびた。
- (46) てつのぼうをまげる。

